

「群衆に同情する」という小標題が掲げられます。この本日の箇所はたいへん短く、また物語展開でもないため、普段なら意にも介さず読み進めてしまうような小さな記事のひとつかと思います。しかし、マタイは大きな意味を含めてあえてここにこの箇所を記します。短い箇所ですが、35、36、37-38と三つに分類され、それぞれ出典が異なっています

実は、冒頭の35節は4章23節とほぼ同じなのです。マタイの構想ではこの二つの箇所は互いに対応し合い、囲まれる5-9章がひとつのブロックになるというわけです。そして、それまで述べられてきた数々の物語を「教え・宣べ伝え・いやす」という三つの動詞を使って総括し、締めくくりとしてあらためて提示しています。出典はマルコ1;39です。つまり、マタイは5-9章のイエスの活動の軸を要約して、これらがこの先、弟子たち(教会)に委ねられて行くことを示すのです。そういう意味でひとつのブロックが終わって、次のブロックへの橋渡しとして用いられる重要な箇所なのです。

続く36節はマルコ6;34が出典です。マルコでは給食物語の文脈の一部なのですが、マタイは前後の文脈を無視してこの部分だけを用いました。それは「あわれみ」という言葉を次の10章1節以下の弟子たちの派遣のモチーフにするためかと考えられます。さらに、マタイは先に挙げた「教え・宣べ伝え・いやす」というイエスの活動の源をこの「あわれみ」に求めたということでしょう。

わたしたちはあわれみなどと言うと、何か裕福な者がそうでない者に向かって同情するような上から下へという構図を思い描いてしまいがちです。しかし、そうではなく「深く憐れまれた」に使用される単語は「はらわた」という意味なのです。それは自分自身の臓腑が切り刻まれる程の痛みを伴う痛切な悲しみを込めた共感という意味なのです。マタイはこのモチーフこそが、教会をして人の中に歩みを進める共同体の礎だと宣言するのです。

37-38節の出典はQ資料です。ここでは畑の収穫の比喻を用いて、働き手の要請がなされます。それは35・36節で記された「あわれみ」によって突き動かされる働き手のことなのです。マタイは福音に生きることは「あわれみ」を担うことであると宣言するのです。

わたしたちは自分というものがどのような者であるのか、どの程度の力を持っているのか、どんな生き方が向いているのかと考えます。自分のことは自分が一番よく知っているなどとうそぶいても、実際にはなかなか分からないものです。どうしてこうも自分を客観的に、理性的に、的確に見ることが出来ないのかと思ってしまいます。おそらく自惚れや見栄、損得勘定や責任感のなさなどが絡み合っているのでしょう。ですから、ひょっとしたら自分で選ぶよりは、人から求められたところに生きる道を選び定めてゆく方が良いのです。消極的に思えるかも知れませんが、その方が比較的正確に自分を捉え直すことが出来るでしょう。なぜなら、それこそが「あわれみ」に生きるということだからです。「自分が、自分が」とこだわっている内は、他者の痛みに寄り添うことなど出来ないでしょう。その自分という狭い枠組みを取り払うために、主イエスはわたしたちのもとに復活され給う事実がイースターの出来事なのです。